

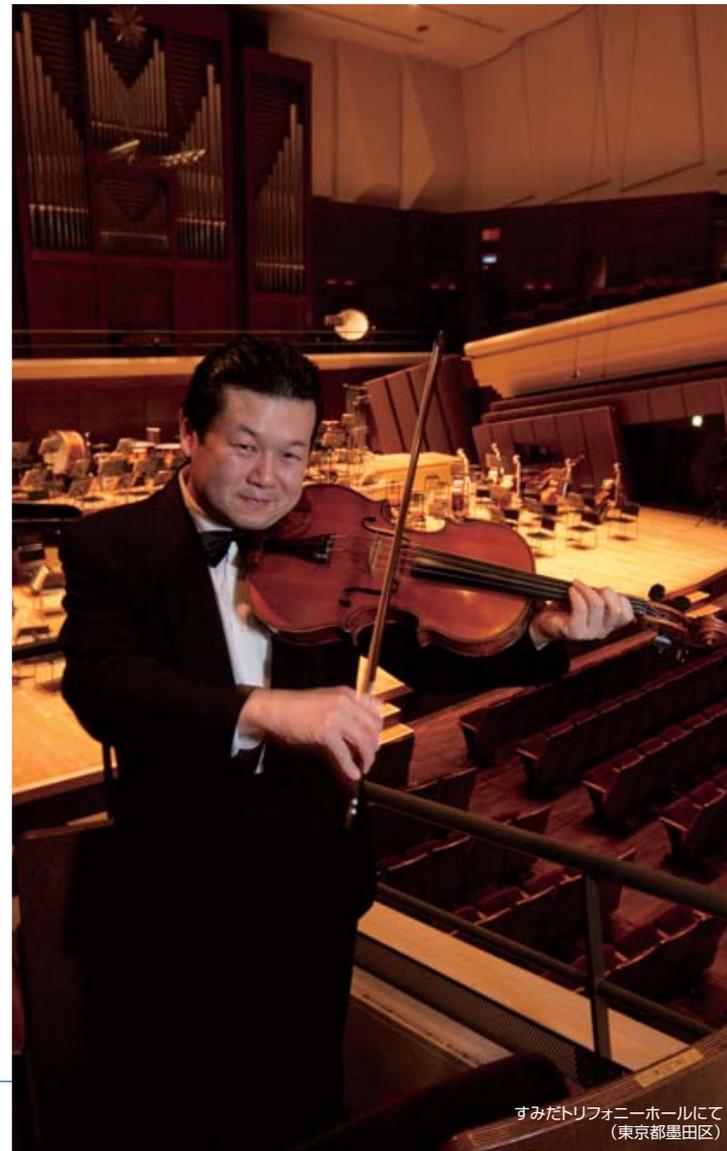
★ 奏でる世界は無限大



吉鶴
洋一
Yoshitsuru, Yoichi

新日本フィルハーモニー交響楽団
ヴィオラ&インスペクター

鹿児島県生まれ。H01年三重大学教育学部卒業、愛知県立芸術大学大学院修了、読売音楽新人賞を受賞。その後松阪大学で後進指導の傍ら、各地のオーケストラに出演。H09年から新日本フィルに入団。現在に至る。



すみだトリフォニーホールにて
(東京都墨田区)

演奏会で多くの人と出会います。
交流の輪、そして音楽好きの輪も広げたいですね。

原点は大学時代

鹿児島出身ですが、高校時代に小林秀雄さん作曲の「伊勢志摩」を合唱で歌ったことがきっかけで、三重県に興味を持ちました。大学時代は楽しかったですよ。総合大学なので、全ての学部生と交流を深めることができ、いろんな分野に興味を持つようになりました。夢は教師でしたが、恩師との出会いがあり、音楽をもっと極めたいと思い、この道に進みました。

演奏者プラス

新日本フィルでは、ヴィオラ奏者として演奏することと、インスペクターとして、楽団員が練習に集中できる環境をつくるお手伝いをしています。新日本フィルの演奏会がないときは、ミニコンサートを開いています。親しい人とお食事しながら、クラシックを楽しむ。そんな時間をすこしでも多くの人にお届けし、心地よい響きを心ゆくまで堪能していただけたら、うれしいですね。「継続は力なり」をモットーにこれからも続けていきます。

音楽の可能性を広げる

音楽活動だけでなく、地域の活動にも参加しています。様々な分野の人との交流が私の音楽により意味で影響を与えています。音楽と絵画、音楽と落語などの様々なコラボレーションで、広がる世界は無限です。音楽は私にとって「自分の気持ちを表現できる」究極の楽しみです。全ての授業に音楽を取り入れ、学んでいく、夢はそんな幼稚園をつくることです。

★ 異文化に学ぶ



金子
正徳
Kaneko, Masanori

国立民族学博物館
機関研究員

奈良県生まれ。H06年三重大学人文学部文化学科卒業。金沢大学大学院文学研究科修了、同大学院社会環境科学研究科修了後、同研究科研究員を経て、現在に至る。



国立民族学博物館にて
(大阪府吹田市)

インドネシアとの出会い

テレビ番組などで観た世界各地の社会や文化に対する驚き…。そこからさまざまな人々の暮らしに興味を持つようになりました。「世界をもっと知りたい」という強い願望を持ち、三重大学に入学しました。大学での研究を進めるうちに香辛料に関する文化や歴史に出会ったことが、インドネシア研究の原点となりました。

好奇心が研究の源

スマトラ島南部のランブン人の生活は、異文化が融合しあいとても特徴的です。実際に現地の人々と一緒に生活すると、それまでの理論と違う発見があり、新たな疑問が浮かび、事実を追究したくなります。これを繰り返すことで、また新しい研究テーマが見つかり、胸が躍ります。映画が好きでよく観ます。仕事柄かも知れませんが、描写されている世界の日常や生活状況など興味は尽きません。

疑問はすぐそばに

「疑問はひらいたまま置いておく」ことは、日頃から意識して学生にも伝えていることです。研究を続けるとすぐには解決できない様々な疑問が浮かんでいきます。その時に解決できなくてもいつでも思い出せる状態にしておきます。そうすることで、何気ない日常の中や他の研究中に思いもよらぬ発見に出会ったり、解決の糸口へとつながっていくのです。

作家塩野七生さんの小説「ルネサンスの女たち」の中に「夢もなく、怖れもなく」という言葉があります。クールなだけでなく、行動してみる。そんな行動的な現実主義者を目指してみませんか？

これまで三重大学という学舎で育った卒業生は約60,000名、社会の様々な分野で活躍中です。

僕が、キラキラ卒業生にインタビューしてみた。おさけの中、取組む努力は想像以上に大変だった。



正しい知識でリスク回避



国立感染症研究所
感染症情報センター
第一室長

谷口
清州
Taniguchi, Kiyosu

三重県生まれ。S59年三重大学医学部卒業。同大学小児科学教室入局。関連病院小児科勤務後、H04年ガーナ国野口記念医学研究所。WHO感染症対策部派遣などを経て、現在に至る。

人生の航路が変わった

感染症プロジェクトリーダーとして、ガーナ国野口記念医学研究所に赴任したのは1992年。途上国では、ちょっとしたことで予防できる病気で、何万人もの子どもが死んでいました。正しい予防知識さえ知っていれば、死なずに済む。ショックでしたが、そこでの経験と出会いがその後の人生を大きく変えました。

国民を守る組織

エイズ、O157、エボラ等の感染症の脅威が一気に世界を駆けめぐった十数年前、すでにアメリカでは、疾病予防管理センターで、8,000~10,000名が国民を守るために働いていました。しかし、日本には組織さえなかった。三重病院の神谷院長に「立ち上げるまで帰ってくるな」と言われ、東京にきました。

パンデミックに立ち向かう

人類が進化しているようにウイルスも進化し、新種が生まれています。従って、人間にダメージを与えるパンデミック(感染爆発)の発生も、いつでも起こり得る状況にあるといえます。だからこそ、危機管理に対応できる組織の充実が、重要だといえます。

私の職務は国レベルの感染症対策ですが、研究で明らかになった感染症やウイルスの情報を正しく伝えることも重要です。正しい知識は、被害を最小限にできます。国民の皆さんに、危機管理の必要性を理解していただくと同時に、マスコミから流れる断片的な情報に左右されることなく、正しい知識を持っていただく、そのための努力と研究にこれからも励みます。

世界はとても広いです。
海外から日本を見ると違ったものが見えてきます。
是非体験してください。
何事も見て、考えて、憶することなくやってみてください。



国立感染症研究所にて
(東京都新宿区)

笑顔のためにできることを



紀南病院 院長
(三重大学名誉教授)

野口
孝
Noguchi, Takashi

秋田県生まれ。S47年三重県立大学(現三重大学)医学部卒業。三重大学医学部第一外科入局。同外科助教授、ピッツバーグ大学移植外科留学、三重大学看護学科学科教授を経て、紀南病院院長。現在に至る。

夢に向かって

昔から描いていた夢、「医者不足で困っている患者さんのためになりたい」このことが現実となる日がやって来ました。以前からこの地域の患者さんを診療していた関係もあり、一医療人として紀南病院勤務を願っていました。「新たな挑戦」にエールを頂き、3年前、30年以上お世話になった三重大学から紀南地域へと「心の旅路」をスタートさせました。

医療について一緒に考える

「地域力」はこの地域の医療に欠かせません。その中で一番大切なのは対話であり、医療問題をみんなで考える意見交換会を、各集落に赴いて開催しました。住民、行政、医療従事者それぞれが本音で話し合っ、限られた医療資源を有効活用するために、問題点を分ち合い、一緒に我慢し励まし合っ、新しい仕組みづくりに努めてきました。平成21年4月には、県と協働で、紀南病院に「地域医療研修センター」を開設することになりました。全国の地域医療のモデルにしようと赴任以来取り組んできたことが実現化されます。

癒しの治療

「病気を診ずして病人を診よ」(故高木兼寛氏)という言葉があります。ここではこの言葉を念頭に、診て、触れて、対話して、日々の少しの変化にも気づく心配りを実践しています。一人ひとりの患者さんに「癒しの治療」を行い、患者さんの心から安心されたときに思わず口からこぼれる「良かったヨ～」の一言が聞きたくて、今後も医療支援を充実していきます。

紀南病院へ行くことは大きな挑戦でした。
今後も出会い、触れ合い、分ち合い、築き合いを、
心通う仲間達と続けていきます。



紀南病院にて
(三重県御浜町)

アイデアを権利に! 知的財産を守る



特許庁
審判部第6部門
上席部門長

酒井
Sakai, Shin
進

愛知県生まれ。S48年三重大学工学部機械工学科卒業。卒業後特許庁一筋35年。自動車用自動変速機、電気コネクタ、オートバイ、ロボット、プリンタなど数多くの技術を担当。

特許庁で裁判長!?

「東京特許許可局」という早口言葉がありますが、実際にそんな部署はありません(笑)。特許庁は、特許、意匠、商標の出願について審査を行い権利を与えるところです。現在は審査官が特許を認めない場合の妥当性や、特許権の有効無効を判断する審判部で仕事をしています。私は三人合議のトップ、法廷に例えれば、いわば裁判長ですね。双方の言い分を聞き、技術と法律の知識を駆使して、問題を解決する確かな判断力が必要とされます。

アイデアと発明は別物です

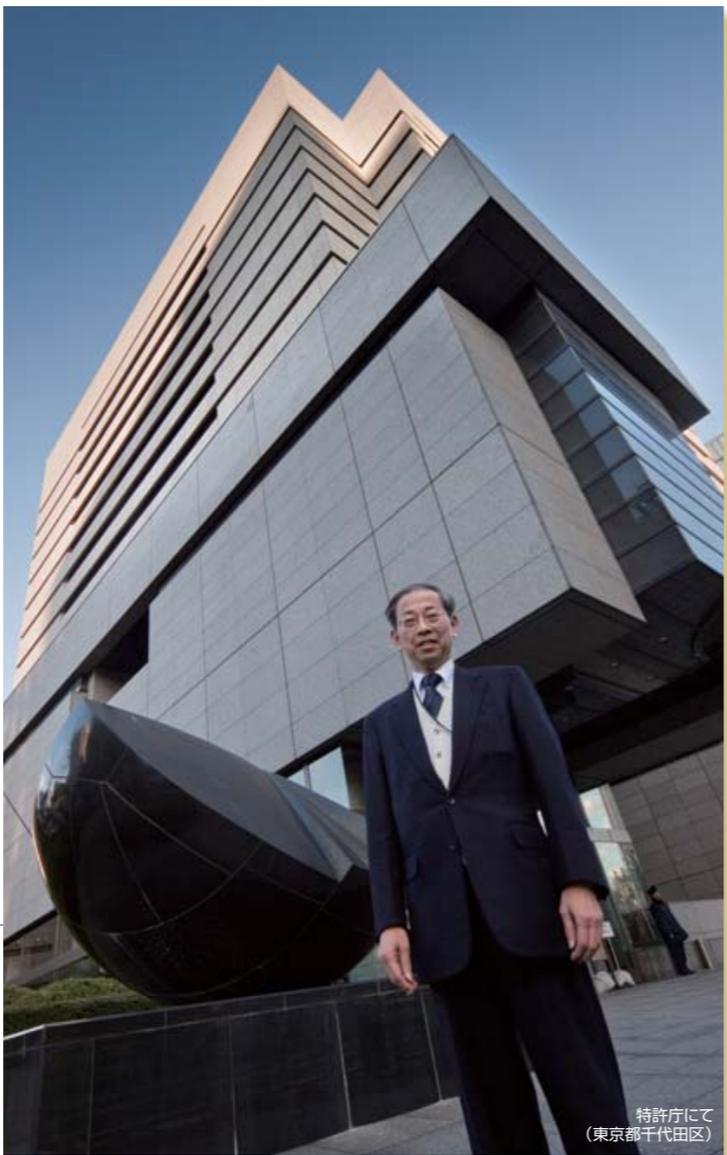
頭の中に浮かんだ漠然としたアイデアには、特許権は与えられません。特許権を得るためには、アイデアを形に、つまり文書化して審査を受けていただきます。他人に伝え、知識が共有できて、はじめて特許発明と認められるわけです。頭の中のアイデアは時間が経てば変わってしまう流動的なものですからね。「自分の考えを正確に伝える」、何も特許に限ったことではありません。とても重要なことです。

技術センスの伝承

新技術に「直に触れる」ことは、今でも技術者の血が騒ぎます。これが私の仕事の原動力でしょう。好奇心が尽きることはありません。最近は入庁当時と比較して世間の知的財産に対する関心が高まり、感慨深いところです。長年の経験を活かし、部門長としてあらゆるノウハウを後進に伝えることが大切な役目と感じています。

何事も一所懸命になることが大切です。社会ではみんなが一所懸命に仕事をしているので、相手の意見も尊重しながら、お互いの調和も重要です。

経済産業省特許庁
http://www.jpo.go.jp/indexj.htm
〒100-8915 東京都千代田区霞が関3-4-3 TEL.03-3581-1101(代)



特許庁にて
(東京都千代田区)

自然から「シゼン」な感動伝えたい



NHK富山放送局
放送部 番組制作 専任ディレクター

増田
Masuda, Jun
順

香川県生まれ。HO1年三重大学農学部(現生物資源学部)農業土木学科卒業。卒業後東京大学大学院修士課程修了。NHKに就職。岡山放送局に赴任。科学番組部で「ダーウィンが来た!」など数多くのドキュメンタリー番組を制作。現在に至る。

大自然の中へ

響く声の主を捜しに森の中を走り回る。40mもある木の上の鳥の巣にカメラを仕掛けに、木登りをする。一瞬の撮影チャンスのために長時間待機し、野宿することも(基本はテント暮らし)…。『生きもの地球紀行』『ダーウィンが来た!』などの番組制作では、大自然に生きる動物を追いかけ、日本国内、そして世界中の秘境に踏み込みます。

知られざる世界をありのままに

番組制作はテーマに沿って綿密な準備をしてから取材します。しかし自然界は私たちの予想を遙かに超える一面を見せて、「この驚きや感動を伝えたい」と強く感じます。映像を通じて伝えられることは、ほんの一部に過ぎませんが、限られた時間の中で「ありのままの自然を皆さんに届けたい」一心で番組制作に力が入ります。テレビを通して動物親子の微笑ましい姿を見ながら、やさしい気持ちで郷里を思い出してもらえたら…、そんな映像をつくりたいですね。

十人十色、社会は個性の集合体

映像制作の現場では、特異な体験や何かに没頭してきた人が意外な才能や特技を発揮して、生き生き仕事をしていますね。学生時代にありふれた学生生活を送るのはもったいないです。研究に打ち込むもよし、独自の趣味や興味を目一杯追求するもよし、充実した時間を過ごすことが、社会に出てきつと生きてくると思います。

「断家に弟子入り」するつもりで、大学研究室の扉を叩いてみましょう。新しい理屈を生み出す前の「~だろう」「~かもしれない」を議論する時期が一番面白いですね。



NHK富山放送局にて
(富山県富山市)